

# 罰法転勤

中野 薫

夏も盛りになって、三日に一当務の勤務体制もなし崩しにくずれ、息抜く暇なく仕事にかり出された。久留米市の道路は幅が広く、暴走族が深夜から夜明けまで横行し、取り締まる警察署側とのイタチごっこが続いていた。

その夜、一時影を潜めていた連中が、植木出荷場の広大な駐車場に集結するという不確実なタレコミがあった。僕はもし情報が事実なら、たったこれだけの人数で何が出来るのかと思った。平穏な日が数日続いたので体制は縮小されたばかりなのだ。

しかし、根こそぎ完膚なきまで無法の輩を懲らしめるより、日夜取締りに従事しているという事蹟を残すことこそを重んじる、上層幹部の思惑は、十分に見抜いていた。

その夜も定められた計画通り、年嵩の巡査部長とひと組になり、パトカーに乗り込んだ。

「部長。さつき耳にはさんなのですが、マル走の集結情報があるのは知ってますか」

くのを目敏く見つけたひとり仲間が声をかけ、一斉に車の空吹かしをして急発進を始めた。僕はそれを見て、止まらなかったパトから飛び降り、逃げ遅れた車に追いつきボディめがけ、いきなり警棒で打った。すると的が外れ、リアウインドウに一撃が当たり、ガラスがひび割れたが、車はそのまま爆音を響かせて瞬く間に遠ざかった。

巡査部長はパトに乗ったまま、降りて来ない。しばらくしてあたりに静けさが戻ると、僕の傍まで歩み寄り、「ちよっと君やり過ぎだよ」とふるえ声で言う。

僕は返事をせず、(さつきはやる気を出せと言ったくせに)胸の中でつぶやき、制服警官として、無難な事案の捌きに長けたこの初老の男と異なる次元で、深い無力感にとらわれた。

それから深夜まで、男と狭い車内で長い時間、無言のままやり過ごした。ボンヤリとなった頭で車載の無線機から流れる通話を聞くともしに聞く。と、別のパトが一台の車を追尾し始めたらしく、逃げる車がこっちのパトに対向して来るのが分かった。

「部長！ 車が前から来ますよ。この道は避けた方がいい」

僕が競輪場の駐車場で思い切った執行をせずと、前よりも幅の狭い路地ばかりを選んでパトは走っていた。巡査部長は僕の突然の声にたじろぎ、意味を確実につかめ

「ああ、聞いたよ・・・」  
「そうですか。こんな体制で何が出来ると思ってるんですし  
ようかね上の人達は・・・」

タバコのヤニが皮膚に沈潜し、ズズ黒く煤けた顔色の巡査部長は、薄闇の中で顔をひきつらせ、  
「中島君そんなこと今更言うなよ。君も県警の一員だろう、もつとやる気を出せよ」

と応え、それは口先だけのあしらいだと、僕は容易く見ぬく。

「だけどやる気だけじゃ・・・多勢に無勢ということもあるし」

巡査部長は、意味がはつきりと飲み込めないのか、それつきり黙った。そして、いつもと変わらず、車の少ない裏路地ばかりを選んで、パトを走らせる。

僕はこの男の小心さと、口先だけの正義感こそが、K警察署の署訓だと、内心苦笑しながら、

「部長。こんなところばかり走っても埒が明きませんよ。もつと奴らのいそうなところを狙わんと」

僕がつぶやくと、巡査部長の顔は一層、青黒く澱んだ。

市営競輪場の駐車場にパトがさしかかった。五、六台の一見してマル走車両と分かる車が停まっている。そして、二、三人の男がその傍に立っていた。パトが遠巻きに近づ

ないらしかった。

そして次の瞬間、すぐ前方の闇に車のライトが浮かび上がり、やつと危険を察知した巡査部長は右にハンドルを切った。すると助手席で身構えた僕の側に追われた車が正面から衝突して、僕は気を失った。

それからどの位時間が経過したか分からなかった。道端の生垣の傍に放り出され、うつ伏せに倒れたまま気を取り戻した。しかし、意識は薄く、何台も集まったパトの赤灯をおぼろに見、立ち騒ぐ人たちの声を微かに聴いた。

再び立ち上がったとき、左肩から上腕にかけて痺れと疼痛があつて、肩の関節がはずれたと思った。左手の指先を動かしたが、緩慢にしか動かせなかった。左腕の上部を右手の掌で押さえながら、そつと揺ると、骨の軋む細かな音がして、どうやらそこが砕けているらしかった。

相手の車は、僕が立っていた場所から少し離れて真逆様になり大破している。運転していた巡査部長の男は無傷らしく僕を気遣う言葉を何か言っていたが、僕には何を言っているのかよく解からなかった。

辺りはパトの回転する赤灯が規則的に照らし出すだけで、開いたままのドアから見えた背凭れのクッションを、人間の頭と見間違え、相手の運転手は死んだと思った。

救急隊の男が、呆然と立ち尽くす僕に大丈夫かと声をか

け、救急車に乗れとうながす。右腕で左手の甲を抱え込んで、ステップを踏み車に乗った。向かいの座席に幼さの残る若い男がすでに乗り込んでいた。まぶたの尻から血がたれていて、片目だけで僕と視線が合った。相手の男だと覚るが、不思議に怒りや恨みなどの特別の感情は湧いてこなかった。さつき、声をかけてくれて、職を離れ僕に親身の素振りを見せてくれる救急隊員が、「無茶をする」と男を咎める一言を洩らした。それに応じて、「お前仕事は何かこんなことしていたら一生台なしだぞ」と僕は裏腹な言葉をつぶやいた。その若い男は、「すみません。すみません」としよげ返っている。

しかし、僕は怒りも恨みも湧き上がるどころか、そういう羽目に立たされ消沈しきつた風情の男に、同情さえする自分を不思議に思った。

別のパトで同じ勤務に就いていた同期の上村が応援に駆けつけていたらしく、

「中島君、大変な目にあつたね。気をしっかり持つておけよ」

この男らしい芝居がかつた大仰な口ぶりと言う。僕は苦笑を隠せずその口ぶりを遮って、

「タバコあるか？」

と、唐突に言った。上村は、はしやぎすぎた自分の言葉に気づいたのか、伏し目がちにしてポケットを探り、タバ

コを一本取り出し、不自由な僕の口に啜えさせ、火を点けたが、

「すみません。酸素タンクを積んでいるのでタバコは駄目です」

救急隊員から止められた。

久留米市で唯一の大病院は、急患の入院を受け付ける余裕がない。幾軒かあたってようやく、胃腸外科の開業医院が救急車を受け入れ、相手の男が先に診察を受けた。

その医師は警察に対する反感でもあるのか、僕の視線を避け、適当な整形外科医をあたってしていると診察を後回しにした。

「不幸中の幸いだったな。君は運がいい」

医師がまぶたを少し切っただけの相手の男に軽口を叩いた。付き添いを買って出ていた上村が、そのやりとりを見かね、

「先生こっちは骨が折れているんですよ」

と言うと、やっと医師は看護婦に命じ、僕に痛み止めの注射を施した。

次の病院が見つかって、寝込みをおそわれたのか、バジヤマにガウンをひっかけた姿の医師がレントゲンを撮った現像に時間がかかり、その間に石膏と綿とでできた簡易ギブスを巻かれ、僕は再びタバコをねだった。今度は咎める

者もなく、僕は煙を深く吸い込んだ。

仕上がったレントゲン写真を医師の男が灯りに透かして見つけている間、骨の欠片が飛び、一本である筈の上腕骨が三本に割れている映像を傍らで盗み見たときは、固唾を呑んで医師の反応を待った。

「治ります。私にまかせなさい」

人のよさそうな表情をひきしめながら医師が言うと、最初の病院で打たれた痛み止めが効いてきたのか、ぼんやりとした頭で僕もまた、樂觀的気分支配された。

浅い眠りの後、こらえきれぬ痛さで目が覚め、ベッドの上を転々とした。左腕を半円の鉄製の覆いに括り付けられて身動きも取れない。骨折という怪我の痛みはそう長くは続かないと思っていたが、痛みは増すばかりだった。朝になって、患部である左腕の上部が丸太状に腫れ、背中にかけて紫色の内出血があると隣のベッドの老人が教えてくれた。回診に来た看護婦に言うと、医師に連絡してくれたらしく、急いでやって来た医師は、顔をゆがめて患部を見つめた。思った以上の重症であるらしく、直ぐに切開して骨の結合手術をすることが決まる。

報告を受けた久留米署の保健婦が、痛さを耐える僕の枕元に来て、事務的な言葉で、事故の状況を訊ねた。

「公務中の災害ですから、逐一県本部への報告が必要なん

です。病態によっては本部長への直かの報告も必要です」

この保健婦の喋り方は、話を早めに切り上げたかたのであろう、立て板に水という形容がぴったりと流暢過ぎて、重い傷を負いベッドに横たわる身にはかなり癪に障った。

僕はそのとき、少しばかりの異変に過敏に反応して、慌てふためく警察組織のことを、痛みと寝不足とで尖り過ぎた頭の一隅で思い出し、怒りというより諦めを感じた。

手術を受ける二時間ほど前、麻酔薬を打たれた。そのあと手術台の上で横たわっているとき、鼻歌さえ口ずさみたくなるほどの、朗らかな気分支配された。身も心も他者に委ねきつてしまわざるを得ぬ、文字通りまな板の上の鯉の心境だった。事故で、気をとりもしどしかけたとき、自分ひとりではどうすることも出来はしないと知り、流れに身を任せたのも、おそらく同じ心境だったのだ。

道端に転がった自分が、突然の凶事に慌てる他者の喧騒を臍に聴いて、無我とも言える安定した気分を得たのだ。

手術は思ったより長引いたが、うまい具合に骨の欠片を一本に繋げたと、医師はレントゲン写真を見せながら説明した。

間を置かずまたあの保健婦が来た。手術は成功したのだ

し、日にちが葉である以外何の変哲もない病態であった。しかし自分の所掌事務以外にはまったく無関心なこの中年の女は、職務に異常に忠実らしかった。僕の災禍が完全なる災禍なのか、当事者としての僕にいくばくかの過失が無かったものかを性急に探ろうとする。公務中の被害事故なら、休暇中の給与や昇給、賞与額に何らの不利益はないのである。

もって回った言い方で、くどくどと説明する。僕は苦笑する他なかった。言われるまま幾種かの書類に記名して印を打ってやる。すると女は役割を果たし終えた満足げな余韻を残して病室を立ち去った。そしてそれ切り二度と姿を見せなかった。

空中に肘を曲げた形で左腕を突き出し、上半身にギブスを巻かれる。しかし、日にちは確実に快癒に向かわせた。今度は県本部警務部長代理と称する男が供を連れ、僕を見舞った。痛い目にあつてご苦労でしたが、一日も早く原隊に復帰しなさいと、階級的高圧性をあらわに、見舞いのことばを言う。おざなり以外のなものでもない微笑を残し、彼らもまた足早に病室を立ち去った。

医師の不手際か、あるいはかなりの重傷であつたのか、一度の手術で完全に骨がつかならず、二度手術をした後、半年ほど過ぎて病院を出た。

はなく、男であるなら少なからず心を動かされる魅力があつた。

豪農の類の農家など今時ある筈はない。どこにでもある家柄の娘であり、僕の実家とも釣り合いがとれた。僕は警官という自分の身の丈と合つた平凡さに惹かれた。娘の母親も、身持ちの堅い職を持つ男に嫁がせたなら、農家の末娘の縁としてこの上ないと言う。警官という職業も、他の公務と名のつく仕事と同じに当たり障りのない、食いはぐれの少ない生業として、世間に流布しているのを、僕は改めて知った。

見合いといつて、仲立ちを頼み儀式ばかりもせず、怪我の後養生に里帰りをした年頃の息子を、同じ年頃の娘に引き合わせたというだけの平凡な計らいである。互いの気に添わなければ、後々何の思い煩いも残らない縁談であつた。名乗りあつただけで当人同士、滑らかに会話が弾む筈もなく、娘は大きな眸で僕を瞬時見るたび微笑み、目を伏せる。ひとしきり親たちの世間話が続いて、やがて尽きると僕の母親が、

「外は雨だし・映画なんかいいんじゃないの」

僕の母親は学問もなく大した社交の経験もないのに、洒脱めかした言い回しをして、ときどき僕を驚かせた。

僕がその言葉に合わせて、背筋を伸ばして娘を見つめた。「映画でも行きますか？」

上腕に橈骨神経と尺骨神経と呼ぶ手の指を動かす神経線維の交叉点があつて、切開手術のとき、そこを二度もさわつたためにかなり重い麻痺が残つた。左手は手首が垂れたまま、上に戻らなかつた。若いだし、使える範囲で使つていればやがて元に戻ると医師は言つた。

しかしそのまま、交番勤務に復帰するのは無理であり、仕方なく里の家に帰つた。

老いた母親は、警官の仕事にこういう類の怪我は付き物であると言う。早く所帯をもつなりすれば、無茶をせず俸給を得るためだけの気楽な生活ができるとも言ふ。世間に流された、親方日の丸に甘んずる公務員の風説は、駐在所夫人の経験のある僕の母親まで感化させている。

母親は近所に年頃の綺麗な若い娘がいて、ころあたりがあると、見合いを勧めた。左腕の機能を回復する名目でブラブラした身の上であり、軽い気分での娘と会つた。左腕はいまだ自在な動きを取り戻しはしなかつた。しかし時がくれば治ると、医師は言つた。その言葉を信ずる楽天的気分の延長上にその見合いがあつた。

退院をして十日ほど後の春雨の降る日に、近所に住むその娘の家を母親と訪問した。厩を改築したという離れの小部屋で、向こうの娘も母親と供に出迎えた。色白で目鼻立ちがすつきりとし、農家の娘にありがちな朴訥内気な感じ

娘は顔を上げ僕を見つめてはつきりと頷いた。

左腕の傷は日がたつごとによくなつた。麻痺が残つていた手首も握力が減つたほかは、ほぼ元通りになつた。そのときは、どこか頼りない自分自身の寄る辺なさに、何がしかの発奮の契機が欲しかつた。僕は結婚をそう捉えた。また思つた以上に多額の保障が、公務中の事故の代償として入り、縁談が進む弾みにもなつた。

災い転じて福を呼ぶという諺そのままに話は進んだが、正式の仲立ちを決め儀式の作法に則り縁が成り立ちを得かけるころから、僕は気が少し重くなつた。

真奈美というその娘は思つた通り、明るく優しく屈託も少なくなつた。僕の少し屈折した内面とは異なり素直な育ち方をしていた。僕は警官という並はずれてわかりやすい仕事をもつ人間である。その観点ではなんの疑いもなく、今まで通りの背伸びのない生活が予測出来るのだし、それなり幸福に満ちていただろう。

僕は、真奈美と出会い婚約した者同士の他愛もない時間を過ごす分には、快い気分を味わいもしたが、真奈美の拘りの少ない平らかな氣質に接する度、早く元の身体に戻し、当たり前の仕事に復帰したいと、少し焦つた。

半年ほど経つて、職場に復帰した。しかし、僕の代わり

に別枠の振り分けがしてあって、形式上僕は余分な人員以外の何者でもなかった。春と夏の年二回の人事異動のうち春の分に引っかけり、すでに欠員は埋められていたのである。

もし僕がそのままこの職を退いたとして、何の不都合もない人事がすでに施されていた。

一 巡査の勤務脱落など、即座に補填の利くもつとも容易い人事なのだ。おまけに僕が負傷した当時の直属の上司であった久本という課長は、すでに他の所属に栄転していた。僕にとつて初対面の定年間際の課長は、実直そうには見えた。しかし、隠しおおせない無気力が、その表情に覗えた。定年までの一時を、退職手当と年金の額とを、日が一算段するタイプではないかと思つた。僕がカムバツクの挨拶のため、席の前に立つと、

「ああ、君が中島君か、久本課長から引継ぎは受けているよ。大変な目にあつたそうだが、しばらくは身体を馴らしながら庶務の手伝いでもしていなさい」

幹部会に諮りあらかじめ決められていた処遇を、今自らの裁量で決したと言わんばかりの物言いをする。僕は頭を垂れる他どんな言葉も見つからない。

結婚を控え、心身ともに充足し、エネルギーに溢れている時期である筈なのに、職場にその発散の場所はなかつた。組織のこの冷たさが、こと僕に対するだけのものであるか、

事の対象者に加えられたのかも知れないとまで思つた。

その後幾度か交番復帰の意志を示す度、中村は「そうか君がそれほど言うなら署長に相談してみるよ」と応えるが、明らかに視線を外した。

それから数ヶ月、ただ出勤するだけで無闇に時間が経つことを気にするだけの勤務を続けた。

真奈美と式を挙げる段取りが整つた。僕は職場のごく限られた人たちの他は、誰にも打ち明ける気になれなかつた。式のあとの続けて出かける新婚旅行のために、定められた十日余りの有給休暇を申請するとき、中村はやつと氣づいた。そしてかなり周章てたように、結婚の報告がなかつたと咎める。

「君そんなことは常識だよ。それで式はいつかね」  
「明後日郷里の町でしますよ」

中村は招待状を一通早急に準備して持参しろと言う。僕が捨てようと偶々持ち合わせていた、微かに食べこぼしのシミのある、残つた案内状をすぐさま持つて来ると、中村は目敏くそのシミを見つけ、僕の方を一瞥して、  
「仕方ない、これでいい。署長は部屋に居られる筈だからついて来なさい」

無気力を、全身に隠しようのない、上意下達の組織で中間幹部たらんがため、おそらくは全精力を注ぎ込んだので

ふつうのこととして組織すべてに行き渡っているものなのか、無論このとき分る筈もない。

新しい中村というその課長は、しばらくの間、そのままでいろと言ひ続けた。僕がもしそのとき我を忘れ、職を辞すことを申し出たとして、強く引き止めはしなかつたに違いない。

「課長、腕はもういいようですし、そろそろ交番に出たいと思ひますが」  
ひと月ほど経つて、僕は直訴した。

「いや。君の気持ちは分かるが、ゆつくり元の身体に戻しなさいよ」  
とつづくに身体は元に戻つており、すでに幾度か意志を示していた。

中村は齒の具合が悪いのか、能面の翁によく似た口唇の窄め方をし、鼻の下と顎に縦皺をよせて。ピチピチと口の中で音をたてながら喋る。その時々部下の身上や心境を察しようともしない無関心が、氣忙しく瞬かせる輝きのない眼もとに表れている。

僕は事故のときの暴走急発進する車に警棒を振り下ろした僕の執行を、パトに同乗していたあの巡査部長が報告しており、僕の身上には沈着冷静さのない粗暴な特異人格の持ち主とであると朱書きの評価が書き加えられたのではないかと疑つた。そして部内で「罰法転勤」と呼ぶ報復人

あろう、風采の上らぬこの初老の男は、後ろに僕を従え、それでも居すまいを正すのである。

新婚旅行から帰つて、家賃が安いだけが取り柄の粗末な借家に、新居を持つた。

その家から初めて職場に出かけようとする朝、真奈美は祝すべき新しい門出の日にと赤飯を炊いた。僕は真奈美のまつとうに育ち上がった氣質に、感謝しはしたが気は重かつた。勤めに出たとして、力の限り仕事に没頭するでもなく、自分本来の勤務の状態ではないことに、何かしら後ろめたさを感じたのである。

僕の結婚を人づてに聞いた同僚は口々に祝いの言葉を投げかける。しかし僕は豁達にならぬに、それに応ずる氣概が湧かず、無言で微笑を返すのがやつとであつた。

自分を押し殺して業務をこなさなければ、公務員の世渡りにはならないくらい分かつていた。しかし、出る杭は打たれるとはこういうことであつたのかを、日々思い知つた。暴走族という社会の害悪に、敢然と立ち向かつたときまでは自分では言わない。しかし、その片鱗を示した人間を真に労う温情くらいありそうなものを、この職場はむしろ異端と見なして黙殺し疎外する。

僕は不満をどうにか押さえつけて、真奈美との日々をや

り過ぎた。真奈美は詮索しない、心理の駆け引きなどない女性であったので、僕の憂鬱を重くはしなかった。真奈美が腹に子を宿しつわりの吐き気を訴えたころ、僕を遠ざけていた中村が、珍しく向こうから声をかけた。「君の怪我の具合を考えて・・どうだろう。駐在所の勤務をしてみたら・・」

怪我がとくに治っているのは、如何に目下の処遇に無関心の中村であっても、気づいていた筈である。定年で欠員になる、久留米市に隣接する郡部の町の新興地を管轄する駐在所勤務は、打診を受けた者から悉く拒否され人選に行き詰っていると、署内のうわさで聞いていた。

「私はご存知の通り新婚でありまして、妻は最近妊娠したようです。いま環境が変わると取り返しがつかなくなるとも思うのですが」

日頃の蓄積した不満を、ぶちまける寸前までいったが、危うく堪え、平静を装い沈着に応える。

人の心の壁や情をくみ取る、こまやかな心遣いなどは、まったく無関係な場所ので生きながらえてきたらしい、どうみても無気力を隠しおせないこの初老の男は、僕の静かな表情を、与しやすしとでも見たのか、

「それなら出来る限り面倒を見るから承諾しなさい」

慇懃な言葉付を変え高圧的に言った。僕は怒りを抑え、無言のまま視線を落す。

のイメージだが、実際は相当違っていた。

古手の警官は殆んど自宅を持っていて、家族の犠牲を払ってまで働くなどは好まなくなつた。それで駐在所夫人には、パートタイマーの主婦が得る額ほどの手当がつくような施しが採られた。駐在所希望者確保のための優遇措置である。

家族と共に常駐する駐在所という勤務の形が、役割をなくし時代にあわぬ無用の長物になりつつあるのを、警察内部でも危惧してはいた。しかし、滅私奉公という古い価値観の象徴ともいべきものに代わる新しいビジョンがある訳でもなかった。

筑後川をはさんで東に久留米市と接するその郡部の町にはふたつの駐在所があり、そのうちのひとつに僕は赴任した。

隣接駐在の篠山という巡査部長は、県本部交通課での勤務が長かつたと、いつも自慢した。僕より年嵩であったが僕にしてみれば、気恥ずかしく思いもつかぬことを、薄っぺらな正義感で身を飾り表現してみせる。

「この前はつっぱりの少年に焼肉を奢ってやつたんだよ。日頃親が食わせていないのか、食った、食った」

他人への施しが、たとえ善意から出たものであったとして、思いつきだけではない、熟慮した跡が見えなかったな

「それじゃ今から署長室に連れて行く」

いよいよ命令を下す幹部たる顔つきを、顕わにした。電話中であつた署長が、中村と僕の姿を認め、受話器を持ったままぞんざいに応接のソファに座るよう指さした。そして受話器を置いて直ぐ、

「君、行きたまえ。駐在所に」

有無を言わせぬ口吻で言い放つ。僕は無言のまま、呆然と立ち尽くすしかない。

家に帰って真奈美に「駐在所に行けと言われた」と何気なく端的に言った。

真奈美はそれが夫にとつていかなる処遇なのか、考えもつかないのは、あたりまえである。真奈美も田舎育ちで、集落の一角に赤い灯をともした粗末な普請の家があつて、警官が家族とともに常駐しているのは見て知っていた。

「俺はいいんだが、おまえの身体が・・身重だし」

「私なら心配いらぬわよ。それくらい大丈夫よ」

僕はまったく未知の生活をそれなりに心づもり、微笑さえ浮かべ、抗いの言葉ひとつ吐かない真奈美の気丈さに、再び援けられた。

閑散とした山間や田園地帯で、年嵩の警官が家族を伴い、昼夜を問わず職務を果たすというのが、知れ渡つた駐在所

ら、そんなものは猿芝居である。

交番や駐在所の制服警官には日常課題のひとつとして、軽微な交通違反検挙があつた。この男は、管内住民からの評価に敏感であり、自分の管轄ではこの仕事をしない。もつぱら僕の非番の日をねらい、僕の管轄区域で違反を検挙するのだ。

あるとき田んぼのあぜ道をあやうげに耕運機を操作して、水を見に来た老百姓を見咎めた。不運にも老人の運転免許が失効していて、篠山は罰金を徴すると頭ごなしの説諭をたれるのだ。

どう見ても朴訥善良げなその老人は、生涯初めて負わされるに違いない贖罪に、涙さえにじませていた。

妻の真奈美はたいした異常もなく腹の子を太らせた。初めて経験する特異な環境で、それほどの労苦も見せず、地理の案内や来訪者の応接、巡視する署内幹部との談笑、夫の同僚とのつきあいまでこなす。

「篠山さんの奥さん、ちよつと失礼な人ね。この前用事で近くまで来たから寄つてみたつて、それはいいんだけど、裏の庭の草を取れとまで指図するのよ」

温順な真奈美が、隣の駐在の女房の言いくさによほど頭にきたらしく言う。

「そうか。おまえに言ったつて無理だよな、その身体じ

や」  
篠山は、妻や子までも自らの職業に適したかたちに組み込み、粉骨碎身業務に徹するかたちを拵えた。他人に見せつけるための方便である。しかも、何がしかの称賛や見返りを必ず画策する。

日々の課題に巡回連絡と称する活動があつた。家を一戸ごと訪ねて、家族や近隣の住民の近況を把握し、犯罪の抑止や検挙に至るかもしれない端緒、情報を得ることを目的とする。しかし、すでに村落の閑閑な実態は少ししか残っていない。昼間訪問したとして、アパートやマンションは無論、農家であつてさえ、働き盛りの人たちは、学校や職場に出て、不在である。たまに老人が家にいて、何やら訪問した警官と話しこむ姿が、昔ながらの駐在警官のおもかげは留めてはいた。

しかしそれはすでに、現実には多発する犯罪に対し即効的結果は期待できなくなつてしまつていた。下級警官から上層の幹部まで、そのことを実感してはいても、伝統的なその方法に代わる効果的な手段がある訳でもない。

僕が担当した駐在所のその地域は、昔から氾濫水害を繰り返す日本の三大暴れ川のひとつにも数えられる筑後川に沿つていた。その駐在所の歴代勤務員のうち、史上稀に見

る大水害のときに勤務していた警官は、寝食を忘れ人命救助にあたり、遂には過労がたたり殉職したと、駐在の沿革録に載つていた。その繰り返された筑後川の氾濫は、より肥えた土を堆積して、野菜の特産地として名を馳せた時代もあつたのだという。

しかし広く平らに開けたその平野は、道路や鉄道も通じ、今や新興の住宅地として最高の要件を供えていた。その結果、県営の集合住宅が瞬く間に軒を連ね、最終的には高層のマンション形式の県営団地が完成した。そのため僕の担当する巡回連絡受け持ち戸数は一挙に七百世帯の増加になつた。農家が多数を占める旧来の受け持ち世帯と合わせると千世帯を超えた。

僕は軽微な交通違反の検挙を心の中ではお茶濁しの仕事であると考え、なるべく加担しなくなつた。しかし、拝命して五年にもならぬ駆け出しの巡査にそんな自由が許される筈がない。僕の交通違反検挙件数は隣接の篠山巡査部長に比べると極端に少ない。その分を窃盗犯即ち泥棒の検挙で挽回しようとした。泥棒を捕まえぬ警官はねずみを捕まえぬ猫であるという俗っぽい簡易なことわざを僕は重んじた。

新興の集合住宅は人口の増加につながる。地元の中学校の生徒数が増えると、元来素朴でおとなしい生徒も、街から転校してきた悪ぶる生徒の感化を受ける。ある少年を車

上狙いの窃盗容疑で緊急逮捕したが、この少年の身柄は少年係より捜査三係の盗犯係が執つた。侵入窃盗を含めた余罪がそれほど多かつたからである。

駐在に赴任して二年目の冬に帰宅中の若い女性が胸や尻を触られるという、悪質重要犯罪に通じかねない事案が多発した。町内会の有志に働きかけ夜警を一緒にした。元来が朴訥な農業従事者が多い地域である。駐在の若輩巡査の働きかけに相応に動いてくれた。当時はマンモス団地が出現したとはいえず未だ村落共同体の良風は十分に残つていた。その夜警は功を奏し事件は止んだ。容疑者の検挙までに到らなかつたのは心残りであつたが警官が町の安全を確保したいという意欲を真に持つなら、住民は相応に動くということを知つた。

それは筑後川沿いの伝統ある古い農家に昔からあつた共同体の意識と、水害のとき命を賭して人命救助にあたり殉職警官まで出したという警察の良質な伝統が、多分に影響しあつたからに違いなかつた。

僕は軽微な交通違反の検挙を、益々ないがしろにした。それで僕の勤務評価は益々低下する一方であつた。また隣接駐在警官篠山巡査部長のスタンドプレイの多い仕事と人格を強く軽蔑した。無論、僕よりこの人の方が部内で重宝がられたのは当然である。しかし僕はこんな警官をしか評価出来ない警察の懐の狭さや浅さに強い反発心を持つた。

僕は三年その駐在所に居てその後、久留米署管内の交番を転々とした後、生まれ里の筑豊地区の警察署に配置希望をしていたものを、県最南部熊本県境に位置する大牟田警察署に飛ばされた。

巡査にとつて一番の困惑恐怖は、暴力団や悪漢との渡り合いなどではなく、この「罰法転勤」と呼びならわした意に染まない配置換えなのである。

「了」